



## 昼寝の仰向け寝サポートをしても乳児が十分な昼寝が取れることが明らかに ～保育園での乳幼児突然死を予防する仰向け寝サポートを睡眠から評価～

秋田大学医学部附属病院（病院長・南谷佳弘）・精神科・太田英伸医師、日本赤十字社医療センター（病院長・本間之夫）・小児科・大石芳久医師、多摩北部医療センター（病院長・高西喜重郎）・小児科・小保内俊雅医師、聖路加国際病院（病院長・福井次矢）・小児医療センター・中川真智子医師、聖路加国際大学・草川功臨床教授、東邦大学医療センター大森病院（病院長・瓜田純久）新生児学教室・奥田仁志教授らのグループは東京女子医科大学（仁志田博司名誉教授）、鳥取大学地域学部（儀間裕貴講師）、ユニ・チャーム株式会社（佐々木徹、佐藤俊仁）との共同研究を通じて、1-2 歳の乳幼児の突然死予防のために昼寝の仰向け寝サポートを実施しても児が十分な昼寝が取れることを明らかにしました。この研究成果は、英国のオンライン科学雑誌『Scientific Reports』に掲載されました。

（論文名：Postural change for supine position does not disturb toddlers' nap.

<http://www.nature.com/articles/s41598-020-68832-3>）

多摩北部医療センターの小保内俊雅医師は、保育施設での突然死について調べるため、平成 20～24 年までの 5 年間の「保育所及び認可外保育施設事故報告書」を詳細に分析しました。その結果、5 年間に保育施設で死亡した乳幼児は 59 人で、そのうち 50 人が睡眠中で、56%の体位が「うつ伏せ寝」でした。また、近年、1 歳以上の乳幼児の突然死についても、「うつ伏せ寝」が危険因子である可能性が国際的に指摘されています（Crandall & Devinsky. Lancet Child Adolesc Health, 2017）。今回は、一人の保育士が複数の園児の昼寝の体位、睡眠状態をモニターできるシステムを開発しました。このシステムにより園児の「うつ伏せ寝」を検知し、保育士に自動的に通知し、そして仰向け寝サポートを実施しました。そして睡眠評価を行った結果、突然死を防ぐために昼寝の体位変換をしても園児が十分な昼寝が取れることが明らかになりました。

これまでも、保育園で昼寝の際に体位変換すると“昼寝を十分取れなくなる”、“一度に多くの園児の体位変換を完璧にすることは難しい”という声が多かったです。本研究ではこれらを科学的に確認し、乳幼児の突然死を防ぐ仰向け寝サポートで必ずしも園児の昼寝が妨害されないこと、またモニタリング・システムを利用すれば、少数の保育士でも園児の昼寝の状態を効率よく確認できることが明らかになりました。今回の知見は、保育の現場における昼寝のルールづくりにおいて有用と考えられます。

### 【問い合わせ先】

秋田大学大学院医学系研究科・医学部

総務課長 斎藤 建一

TEL：018-884-6005

E-mail：ksaito@hos.akita-u.ac.jp